
日本黒示録

方伯謙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本黒示録

【Nコード】

N2505L

【作者名】

方伯謙

【あらすじ】

経済的膨張の過渡期に入った中華人民共和国。内外に持つ疾患を解消するために秘策を抱え戦争への道に飛び込んでゆく。一方長く平和の時を過ごした日本は世界の一員という自覚を遠く失っていた。狭間の戦いの果てに二つの国が得るものは一体何か？

1・王国への道（前書き）

携帯買い替えによる不手際で、前に書いた全てを消してしまいました。

大変申し訳ないと思います。

残っている部分で再構築を行いながら再び描いていこうと思います。

読んで下さったいた皆様に、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

1・王国への道

中国共産党、党本部にある一室はまるで、時というより時代そのものが止まってしまったかのような部屋だった。

近代化、改革開放という大看板を全面に出している党の表の顔とは違いすぎる風景は、時間という針に凍りという糸を通し紡ぎ出したのではと思えるほど静謐で感情を必要としない空間。

円形の組まれた室の中はくまなく赤茶けた色で統一されている。

龍の飾りも無ければ福の文字もない、高く取られた天井の果てに小さな小窓、さらに突き抜けて上る漆黒の空の中に赤い星が輝く。

潮騒のように地べたを這う唸りと、咳払い、暗闇のテーブルに浮かぶ小さな導の光が揺れる事でここに人の影がある事を教える。

霞みに揺れる人影に有るのは険の立った皺の河、無数に流れる労苦の傷に手をさすり合わせる老人達は円卓を囲むようにイスに座っている。

ニスを塗り光沢を持っていたであろう琥珀色のテーブルもイスも、人の手で何回、何万回と触れられた重みに削られ緩やかなカーブを描き程よい調度の手元に、骨と皮の指が食い込む

室の全てが現代の物とはかけ離れた、まるで凍り付いた空気の中にひっそりとただび姿と、何度もぶつかり合った跡、平らな世の中がなかった時代を反映し押しつぶされたへこみと起伏となって残るテーブルに置かれた灯りの前数人の老人が囲んでいた。

どれも人民服とは遠い服、民族服にも似た衣装に身を包んだ姿で。

「うまくいくのかね？」

雨樋をとおり水が押し上がるような響きが誰となく放たれる。

中央に座った老人のとなりすっきり髪の毛を失い丸く剃り上げられた頭に刃物の傷を残した老人が口にくわえた煙管を離す。目に掛かるほど、覆うように伸びた眉毛の下で獰猛な輝きは自分たちの前にただ一人、この室において立ちつくしている者を恫喝するように聞

いた。

「失敗はありません」

流暢な言葉、となりに伏していた者は別の言語に直してそれを伝える。

この国は多様な言語を持つ一つの国家である。言葉の分別は最初の暗号である、知らぬのならばそこに愚か者の塚が立つだけである。返された返事を吟味する鼓動が灯りを微かに揺らす。

円卓のテーブル、前方に居並ぶ老人達は威圧的な黒い影は幾重も駆けられた文書のようなささやきを続け持っている。

若さだけでは到底太刀打ちする事は出来ない威圧感、歴史を刻み込んだ嗚れ達の目はどれも鋭い。その中で人民服を背筋も正しくに着こなした彼は恐れることなく口元を、影達にわかるように広げる。

老人達の、心を刺し通すような視線の前にいる男の顔に、芯の通った野太い声が問う。真つ白な毛髪、まるで仙人のような男は微かにゆれながら

「白鷺はどうなる？」

「猶予付きですが、沈黙を守るそうです。それにあの国も損はしませんし」

一番の懸念にもすばやく答える。迅速で揺るぎない強さは躊躇しない言葉の端々にある、老人達も滞る事のない返事に顔を見合わせて頷く。

「失敗してはならない我が国を富ませ、かの国を変わらぬ罪の色に染めよ」

総意は中央に座っていた男の口からだされた。

長い眉髪の下で黄色く光る野心の目は念を押すように、畏れを飛躍させるように灯りを消すと香炉のニブイ煙だけが世界を支配する。

「かの国を黒く染めよ。活かさず殺し、罪を背負わせよ」

小さな灯り取りの窓から風が降る。隠された権力者達の顔から灯りを奪い、言葉の圧力が閉じられた室に響く

「そのように聞き、そのように行え」

「おおせのままに、日本は世界から切り落とされた闇の落とし子。身の程を知らしめてくれましょう」

雄々しき返事に年寄り達は香炉の煙とタバコの煙に自分の姿を霞ませながら、ぼろになった歯に喜びを浮かべて見せた。

「行け」

暗闇の扉は歓喜の言葉と共に開かれ、老人達の前に立っていた男は踵を返すと光の続く道に消えていった

大理石よって作られた壁、繁栄を我が物とした中華人民共和国の壁に手を当てる

冷えた指先で自分の臉を触ると、後にした室に響かせる大きな声で吠えた

「日本を滅ぼす事、二度と我が国に逆らう事のないように」

芯の通った意志を伝える拳、強く固めた覚悟を握ると自分の内に向かつてつぶやいた宣誓を、光溢れる通路に並んだ幹部達に向かつて党本部全てに響くような大きな声で再び叫んだ。

「日本を滅ぼす！！二度と我が国に逆らわぬ程に！！」

響き渡る声に幹部達は皆拍手を捧げた

「日本に償いを！！死よりも屈辱を！！」

時は2015年、世界経済の中枢に鎮座した中国は復古の力を誓った雄叫びを高々とあげた。

1・王国への道（後書き）

新製品が好きです。携帯を買い換え使いにくい事を元にさらに変更をしようとしたらこうなりました。

歳をとると色々な事に失敗するという事を如実に感じた事件でした。

2・東海艦隊司令官劉歩織（前書き）

再構築で出せる部分を早く出して行きます。

2・東海艦隊司令官劉歩織

勇み足の行軍、部屋から先の開かれた窓の前で老人達との会話を終えた彼は考えていた。

これが茶番になつてはしまわないかと、頭髪の半分以上を白髪に買えた彼の髪、眉毛にも細かく入る白い老い大声をあげ幹部を鼓舞し叩き上げるような発言が不似合いな静かな目は紫禁城の王道色屋根を見つめていた。

遠く続く楽土の雲の重ねたかのように見る事のできる建物を見る目は冷たく、口にしていた煙草を離すと先ほどとは違い過ぎる重くも落ち着いた口調で問うた。

「君は歴史に詳しいかね」と、光を取り入れるたるに大きく口を開けてグラスエリア

無駄とも思ええる程に広大な間の中、出入り口の扉付近に立つ男に聞いた。

迷いの眉間を察したのか影の男は何も言わず、彼が本当に言わんとする言葉を待つ。

ここは先ほどのさび色で時代を釘差し止めてしまった室とは違う。改革開放と銘打ち共産党一党の支配の中から拡大を続けた国の中枢である建物は、嘘のように何もかもが外向きに大げさに作られている。

虚構の空間は白く塗りつぶされた壁に一つの沁みもないが、彼の心は曇っていた。

窓の向こう、黄土の天地に続く雨の重さに湿った空気を毒のように見ながら

「ここでも歴史という風景を見ることが出来るが、私はね、かすんで見えるこの景色が我が国の歴史を良かれと暗ましているようであつたらまらなく辛いのだよ」

目を細め栄えある皇帝の城を見る彼は煙草を灰皿の中に放り投げた。

中国共産党本部が立てられている前に広大な湖が隣接する。中南海という人工の海がここに作られたのは12世紀、金王朝の時代でその頃は栄華を楽しむ皇帝の夏の庭にすぎなかったが、後を継いだ遊牧の大帝国元により大都^{だいと}として帝国の中枢となった頃に、宮廷の一部と世界の姿を映し出す庭して運営されるようになった。

続く時代の中、皇帝達の安らぎの場として拡張を続けられ目樂しませる庭は生き続けた。帝国が終わり、中国が動乱の時を越える間も、そして今に至る繁栄の時も。

今でも栄華を伝える建物にはかわりないが、過去の栄光である事も事実。

王の色である黄色の瓦を眺める細めた目に、やっと近づき後ろに立った男は白の軍装を飾る指で払うように触れると

「歴史はそれなりに勉強しておりますが」

潮にかすれた声、浅黒い肌、年の割に恰幅を持たぬ痩せた身に中華人民解放海軍司令職のダブルスーツを着こなす男。指先からつま先まで定規で全てを測ったかのようにピタリと止まっていた腕が白髪之交じりの髪の上に鎮座していた制帽をとると

「どの歴史についてお話ししましょうか」

目の前、グラスエリアから晴天を曇らす科学の雲の下に支配された北京を眺める男は、振り返ることなく手だけで持論を聞くようにと払った

「私はね我が国の歴史を、石の歴史だと考えている」

2015年、この年にはそぐわないマオスーツを着る国家主席は背に付く男に比べれば色も白く、豊かな頬を持っている。

その顎を指がさすると

「我が国の歴史は一つ一つの歴史の節目をまるで石をぶつけてくりつけたように見えるのだよ」

中国という国の歴史は、硬質な石が遠慮無くぶつかり合いつながった形に見えると言う事。

その石のぶつかり合いによって先の文明はまるで奥歯が獲物を咀嚼するように押しつぶされ、すり下ろされ次の時代には粉々になった破片しか残らない。

同じように人も、国が代替わりするという高い波に多くの者が掠われ、波風の力の前無力なまま岸壁に叩きつけられ血肉を砕いて藻屑となりつなぎ合わされる歴史という石の間に挟み込まれていると。彼の常なる持論に、後ろに立つ男はただ頷く。同じようにガラスを流れ落ちる露の迷路をおいながら

「多くの血によって我が国は新たな波を起こし繁栄にいたるといふシステムは今も昔も変わらないのが…実に辛い」

中国共産党の新しい世代、時代の星となった彼は経済の発展によって青空と水を失い続ける祖国を憂いていた。

「かの国の歴史をどう思うかね？」

相手の言葉を制していた手のひらを返し、初めて顔をつきあわせると前に立つ友に意見を求めるた

「劉司令忌憚なく聞かせてくれ、君は日本に留学した事のある数少ない知識者だ」

発言にタブーはないと言う。共産党本部の中で日本を褒めるような言葉はあまり好まれないのは今も昔も変わらない事だが、国家主席たる男の許可の元ならば問題はない。褒める事も相手を知る事、相手を見下したときに心の慢心という落とし穴を作ってしまう事を彼はよく知っていた。

静かに流れる雨の音色の下で、ふくよかな彼はどうぞと意見を促すと、痩せた雁の司令は少しばかり甲高い声で答えた

「あの国の歴史は竹のようだと感じました」

「竹…」

主席の前、司令職の彼は手を緩くはためかせて見せ

「そうですね、どんな風にも柔軟に受け答え決して倒れてしまうことのない柔らかな思想と強さ、それに新しいものをすぐに自分の力として取り入れてゆくすばらしさを感じます」

「手強そうだ」

自分の前で雄弁に日本を語る司令に白い眉毛は困った顔を見せるが、相手は本気ではなくふざけているように目を瞬かせ主席に向けて続けた

「しかし竹は折れてしまえば、戻るところがありません」

前にかざした手をパタリと倒し

「あの国は1945年に折れてそれきりです」と笑って見せた。

「折れたままか」

自信にあふれた顔の司令は

「老人達の心配は杞憂に終わります。我が国の発展のためにこの戦いは避けられません。必ず勝ちます。良い結果を得て我が国をさらなる飛躍へ導く事になります」

「劉司令、私もそれを願っている。願って…出来れば同胞の血を流したくはないが」

出されていた手に握手、そのまま両の手を重ねた二人の男は晴れる事が無くなってしまった紫禁の空を見つめた

深く、海の底のよどみに近づこうとする日々がこの1年続く空に光を求めていた

笑わない主席の目には苦悶の兆しが走り、決断を下す事の重さを実感している事が見える。

彼の決断を実行する者へ、繋がれた手に意思の力が伝わると、劉司令もまた俯きかけた顔をあげ自分の心を叩くように告げた

「何も無くさず国家を丸く治める事は出来ません。老廃した垢を捨てるのに覚悟はいりますまい、それと同じ事です」

決意の実行を返す握手で

「これは自然の成り行き、国家を立たせる為の有るべき戦いなので
す」

そう言つと

「かの国を打ち、痛みを我が者に」胸を叩き下された決意を焚きつけ
「共に血をはむ者となりましょう」劉司令は告げた。

誓い言葉とともに中国共産党中央委員会総書記

そつけいげん 宗慶元は、老人達

の室を見据えると体を返し背中であつた

「東海艦隊司令劉步織とうかいかんたいしれいりゅうほせん今より作戦の任へむかえ」

強い口調の指示に、劉司令は最初に見せていたように一分の狂いも見せぬ正しき姿勢で敬礼を返した。

「お任せ下さい」と

うねりの深き闇の竜は天を目指す。世界が知る事になる空前の戦いは闇から闇への冷温の波となりここに開戦される事になった。

2・東海艦隊司令官劉歩織（後書き）

前に出していた物より、中国寄りな作品にしたいと思います。

3・漂流国家（前書き）

長く訂正の期間をおいてしまった申し訳ありませんでした。
私事で慌ただしい日を送っております。

10月8日に、また少し改訂しました。どうも意気込みだけが先を
進んでしまっていけません。

3・漂流国家

民主党政権による外交・戦略の停滞で日本が世界から後れを取った期間は4年にわたった。

この間世界はあらゆる方面で前進をしていたが、日本だけが階段昇降という何の後ろ盾もない中で準備運動をするように停滞した政治的期間を送っていた。

こうした現状でも、進むことに人やりである国は邁進の槍をふる。普天間の問題から向こう米国は日本の動向に対して極めて懐疑的ながらも、アジア共同体構想にはしっかりと横やりを入れ続け、簡単に日本が宗主国を変えられないような外交手腕はしっかりと発揮していた。

日米安保は太平洋諸国にとって極めて大切なものであるという認識は、当時のルーピーズ政権である民主党も表向き理解はしていたようだが、国際社会に不慣れだったルーキー総理は自分が日本国という会社社長になった事にたいする責任感をまったくもっていなかった。

機会は訪れたと中国が身を乗り出す、そういう事件がこの時期に起こっていた。

騒音をうずたかくあげる小鳩のへりから両耳をふさぐという茶目っ気を見せて劉歩織はデッキに降り立った。

軍艦というには白すぎる感じで、海の潮を絡ますことで目に痛い、それが第一印象としてあがるのが中国海軍の船の上に。

蘭州級駆逐艦、蘭州は2013年までは南海艦隊にて司令方艦艇を置いていたチャイナイジスは現在東海艦隊司令方として使役されていた。

アメリカのイーグス艦の情報をスパイし、それを元に作られたこの船は色々な憶測を各国に呼んだがね今のところ目立った活躍はしていない。

しかし、現在東海艦隊は大事な時期に来ていた。

「お待ちしております。司令」

岩石の顔を持つ大男は鉄の棒のように、荒れ気味の波の上にある甲板で敬礼をし劉司令を出迎えていた。

「うむ、天気には恵まれたな」

軽めの返礼、何度か顔を合わせて頷くと

「あれが鄭和か……」

蘭州の前方を走る白い壁に目線を走らせた。

中華人民共和国初の航空母艦。初物の艦艇を組み込んだ新たな布陣。今日より東シナ海にて演習をするという任務の遂行官として劉はここにやってきた。

そして自身もこれほど近くで見るのは初めての空母に片目を閉じ片目を見開いてみせた。

経済成長を続けた中国はついに自国産の空母の建造に成功した。その証に、驚きよりも興味で手で日差しを避けながら建艦の過程を思い出していた。

5万トン級で通常動力型、ロシアから買い取りを行ったヴァリヤークを基本にスキージャンプ型の滑走路を持つ中国海軍発表では中型空母。

艦体の方は、当初ロシアのウリヤノフスク級図面の解明から得た形を想定していたが、近代常に空母を持つアメリカ海軍の空母をまねた箇所は随所にあつた。

完成の時は大仰な電波がとんだものだったと劉司令は顔をしかめるが、この大きさの空母はアジアの国では初めてのクラスという事もあり、各メディアの声が世界中に空母の名を響かせた。

「^{ジェン・ホウ}鄭和」

建艦の年月は実に遅れをとり、

「難航する空母建造」と初の試みを達観視していた各国の度肝抜く一艦の登場に、アジアは揺れた。

完成された空母の影には、もう一つの同型艦。

中国がいかにも本気で外洋の海へ乗りだそうとしているかを知らしめる名の前に、アメリカはもとより日本は足下を震えさせる事となったが、完成から向こうこの艦の居場所は一行に決まっていなかった。中国沿岸部を初の空母としてお披露目航海をしてみわり、近海で繰り返される飛行訓令以外特に目立った動きのないまま2年を過ごし姉妹艦である「中山」の落成も近づいた今年、急遽配属が決まった。東海艦隊に。

「やはり、大きいな」

船というより白い長城が波を切る図。色合いの滑らかさで兵器のもつ刺々しさを包み込んだ空母鄭和の姿に、白髪り劉司令はまぶしそうに目を細めた。

ヘリデッキの上で去ってゆく回転翼の雑音の下で劉は、いつもの癖である問答を艦長にした。

「君は2011年にあつた、あの事件を憶えているかね？」

今からこの船が向かう海域は近年、日本国との争いの大きな現場となっていた。

「もちろん、憶えております」

石のように硬い面構えが、唾を控えた野太い声で答える

白の人民解放海軍軍装、わざわざ司令官の出迎えのために着替えたであろう糊の利いた袖口を見つめながら

「どう思ったかね？」

劉は制帽を下ろし、休めの指示をしながら問うた。

波はこの海域を覆う季節特有の高い物、すぐにでも司令官を艦内に案内したいという気持ちをはね除けるには緩い口調で

「あの事件で世界は中国の中身が危険である事を少しだけ垣間見たね」

返事より先に、誘導を促す一言。白髪の瘦せた司令官は太陽の欠片がみせるしぶきに目を細め

「アメリカにもしてやられたが」

「言いがかりです！中国は世界に対して多くの工業力を間貸している国であります。あまねく国々にとって安価で安定的な物資を加工精製する能力を有する我が人民に対する国辱にも等しい行為です」

大声で話すには、はばかられる場所にも関わらず艦長は答えた。

例の事件、釣魚島領漁船接触事故。日本でいう尖閣諸島中国漁船追突事故。

資源問題の絡んだこの島の領有権で、お互いの国がトップレベルと民間レベルで顔をつきあわせたのは正直初めて出来事だった。

常に戦争に対して羊であった日本が、政府の弱腰とは別に燃え上がる愛国心というのを見せる事件に発展した。

もちろんアメリカの情報操作は多分にあった。

日本がアメリカからの離脱、新たな帰属国を中国にするのではという動きに敏感に反応し、あれこれと手を高じてきた国は事件を良いように利用していた。

事実、ヨーロッパ方面では何力国が中国のやり方を文化的でないという、非難の言葉を発表する。

それを実で取り返すようにヨーロッパ諸国の頭痛の種であるギリシヤ国債の買い取り継続を発表する。

「金の力では抑えられなかつたしな」

劉司令は白髪の頭を静かに抑え、あの頃の応酬劇を思い出すと苦笑いを浮かべた。

実を取って世界を助けているという力を示し、中国こそが島の領有権を持つにふさわしい国である事を示そうとした作戦は裏目に出ていた。

世界はやはりというか、中国に対して脅威を持ちつつ距離をもった付き合いをしたいと考えていた事が明るみにでただけだった。

「だが、情報は常に一方通行で我らの損失を補填するものもあつた」
「はい、私達は常に前へ向かう事を必須とされる大国です。資源無
き国に文句を言われる筋合いはありません」

やっと歩き出した司令の後ろを付きそう艦長。歩くと行つても部屋
に向かう出なく、ヘリデッキの一番端の波打ちに向かつて

あの釣魚島の事件の影で大型油田の買い取りを行ったのは大きかつ
た。

元は日本が75%もの權益を有していた日の丸油田を、米国が横や
りをいれイランの制裁のため泣く泣く権利の縮小をした。買い手の
付かなくなつた油田をそのまま譲渡される形で受け取つた中国は、
右手で領有権問題で波風を立てながら、左手で相手の弱つた所を叩
いたという形を理想的に成功させていた。

見事に日米の泣き所を突いた。

それでも劉司令が満足するような結果が全て得られたわけではなく、
どちらかといえば世界が中国との線引きを少なからず明確にし後退
の一步を踏み出してしまつたという感は否めなかつた。

「あれは早急すぎた作戦だつた」

事件に一枚噛んでいた司令は自分の失敗に胸を叩くと

「資源無き日本にの持つ驚くべき技術……」

作戦失敗の一因となつた日本の驚くべき技術力を目に浮かべた。

レアアースの輸出禁止は表向き中国政府の指示ではないと何度も広
報したが、実は制限そのものの圧力を各所にかけていた。

資源無き国は一度は圧力に折れ、頭を垂れたのだが……その後驚く
ような事をした。

なんとレアアースを必要としていた器機から、不必要とする精密器
機を作り出していったのだ。

全てを切り替えるというわけではなかつたが、EV車のモーターか
ら携帯電話に使われた物を次々と切り替えていった。

無いならば、変わる形で作り上げる。驚くべき創意工夫と努力の錬
金術の前に世界は注目し中国の焦りを見透かされてしまつた。

中国には技術が無いわけではない、技術を錬成させる場所がありすぎて散漫化しすぎた。下手に金周りの良くなつた富裕層は学歴を持つ我が子を慕いように教育した（一人っ子政策の弊害）彼らは自由過ぎる気質を身につけ、成功しない事からは素早く手を引き、金になる事への執着で中国をある意味牽引したが、執着心や発展、技術の進展にかかる時間を圧倒的に嫌い転職を繰り返すというワーカージプシーの状態が多かった。

つまり成功しなければ意味無しと見捨てる事で技術の前進に一用な時間を切り捨てて、発展を後回しにしていた部分があったのだ。

そういう者達をまとめ、国歌のための力にする奨めを党の中になく、発言力が落ちつつあるという事が明るみに出ってしまった。

中央党本部にとってマイナスを際立たせた事件に、司令は何度か小首をひねる。

「日本の技術をどうやって手に入れるか、どう活かすか、それが力ギだ」

「そんなもの、いつかすべてが中国のものになりましょう」

艦長の大きな黒い拳は、大声で真っ直ぐな道だけを見て言うが

「ああ、なるとも、だが、そこまで……」

しびきを上げる波間の空に、司令の目は補則尖る。

「大国よろしく、どつかりと構えた態度をとり続ける事ができるのなら……あんなくだらない事件は起こさなかった事だろう」

針金のような首筋、痩せた肩にかかる威厳は厳しい目線のまま、後ろに従った艦長を睨むと

「勝たなければならぬ、それも密やかにしめやかに、花火の下の闇のように」

一言一句を丁寧な相手の胸元に突きつけて行く、白髪を知将の目が艦長に覚悟を焼き付けるよう告げると

「そして、技術を持つ日本が手中の猿である事を知られぬように、抱いてやらねばならぬ」

姿勢を改め強い歩調で前に進む、空気を凍らすほどに決意を告げた

司令の後を慌てて艦長以下艦内幹部の者達がしたがう。

「失敗は許されない、だからこそ私が来た」

劉司令は自分の胸を叩くと深く制帽をかぶり直した。

ひさしに隠した鋭い視線の力は、隠されているのに周りにいる者達の肝を冷やすだけの圧力がある。

「今度は……国運がかかっているのだ」

劉司令は自分の胸に手をあてると、計画実行を許可した宗主席の言葉を齒の奥で砕くようにかみしめていた。

左頬に引きつる力のライン

「我が国の歴史は一つ一つの歴史の節目をまるで石をぶつけてくりつけたように見えるのだよ」

「……そのとおりです。ぶつかり合うという変化を呼び込むからこそ歴史は語られる。それを行う者、行った者の評価などは後の時代にしか解らぬもの……」

かみ砕く心の声を、胃に流し込む老将は離れてゆく大陸に目もくれなかった。

真っ直ぐに、今は白い壁に隠されているあの島に向かって勇み足をねじ込む音のまま部屋に向かった。

3・漂流国家（後書き）

私事ですが、長居放置の間も励ましのメールなどを入れて下さる方がいて驚きました。

とても励まされました、この場を借りて感謝を表したいと思います。
ありがとうございました。

4・獅子の経済（前書き）

なんとか改訂をつづけています。おひさしぶりになります。
三話から直してみましたので、よろしければご意見ください。

4・獅子の経済

日本人は不思議な人種だ。

石川がそう思い出したのは古くは学生時代の時までさかのぼる話しだった。

ペントハウスを持つこのホテルの最上階に居を構えたのは、あの事件からしばらく立った頃。

今は昔のように、思い出した出来事と今も自分の隣に並ぶ複数のモニターが薄日上がらせる世界情報に眉をしかめた彼は立ち上がり

「ご苦労ついでだ。一杯呑んでいけ」

目の前に座った恰幅の良い老人に自分のグラスを高く上げて見せた。

「そんな暢気に構えていられるのか？」

断ることはしなかったが、グラスに注がれる琥珀の酒を見つめながら白髭は注意を刺すと

「石川、中国は動きを見せ始めているぞ」

「だろな、ここでも良く見えている」

片目だけを大きく開いた老人の前に、深く座面をとった大きなソファに石川と呼ばれた男は座ると、目の前にあつたパソコンをそのまま彼の側に向けた

「やはり内モンゴルか……」

「何度もけしかけてやったからな、外に目を向けられないように、弱腰の政府には出来ない方法でやつらを閉じ込めてきたつもりだったが」

「やり過ぎたか？」

広く撮られたダイニング、昔は高級貴賓室、国賓などしか泊まれなかった部屋を世界を展望する部屋に改装したのは経団連の最高責任者だった石川の独断だった。

「日本経済を守る者は国賓以上だろう」

胃液をひっくり返した尖閣の事件以来彼らはここに情報基地を置いていた。

「沢登、やり過ぎぐらいでないとヤツらは理解しない」

丸い洒落たグラスの中でアイスの舞が響く、石川の太く鋭い声の前で。

滑る指はパソコンの味気ない文字を指差し、赤いラインで惹かれた部分より下に沢登老人の視線を誘導した。

「限界達したというのが本音だろう、自分の国だと言ってはいるが政治体系は個別の形、基本は抑圧と恐怖だ。しかも同じ民族であっても思想の合致は見られないときたものだ」

老眼の沢登には光り物で切り替わる画面は少し辛いらしく背を離してピントを合わせる

「こんなに「融資」したのか」

億単位の金額が画面に浮かんでは飛ばされる。

「第三銀行でな」

架空の口座名を陽気な声は告げると立ち上がった。大柄な体躯の体を国会議事堂の見えるグラスエリアへと向かわせ

「安いもんだ。たかがこれだけの事で5年の安全を買う事ができた。政府のアホどもの無用な横やりがなければもつと安かったはずだ」

学生時代は猛虎と名を馳せる程に豪傑だった石川、そのやり方には常に賛否がつきまどっていたがあ的事件以来、石川の強行かつ柔軟

な戦略にしたがう者は多かった。

なにより、レアアースの供給停止で会社の損害を重要視した企業は、経済的打撃の大きさを訴え政府の交渉術をへし折る結果を選ばせるという失態を演じた。対外的にも国内的にも大失敗の弱腰外交を見せてしまった日本のありさまに吠えたのは、当時経団連でのナンバー2にいた石川だった。

徹底抗戦が必要であるという石川の意見を無視し、世界中から笑いにされる道を選ばせた同士を許さなかった。

「チャイナリスクを知らなかったわけでもあるまいに、あの国を自分達でコントロールできるつもりでいたのか？」

石川の台頭には追い風もあった。

今まで沈黙を続けていた国民が政府対応許すまじと形に見えるほどの抗議を始めた。

そこから利益主義の金まみれだった頭をことごとくすげ替える改革を起こしていった。金は必要だ、潤うほどにいいだが国を転ばすよ
うな金は必要ない。

強気の理論で1年を待たずに経団連のトップに駆け上がった。彼の年齢からすれば破竹の出世劇ともいえたが、当の本人は年寄りども
食い散らかした日本経済を立て直す尻ぬぐいの役を仰せつかったと
笑い飛ばしたものだ。笑った。

そうはいいいながら、墮落した政治をなりふり構わぬ叱咤でやり込め
黙らせた。

「政治は頼りにならんか、しかしそこが根幹でなければ国際社会と
は渡り合えないぞ」

睨むように議事堂を見る背中に沢登が盃をあけて

「どこかで融合が必要だ、我々のやっている事を政府が理解し、国

として理解をしなければ今度は国歌が瓦解してしまう」

沢登は常に心配を前に置いておくタイプの老人だった。

経済危機、円の価格は当時80円。現在やっと92円台に戻ったが事件後一時80円を割り78円という最低の位置に付けたことがあった。

これで先進国と言えるのかという危機的状況に経団連は日銀と政府と肩を組み合わせ戦った。

これも石川の株を挙げる事になったが、苦労続きの5年に彼の髪に白いものが多くなったという実感にもつながる。

沢登もこの時、新人生兼の民主議員を多く説得したものだだった。

経済状態というものは色々なものにウエイトを持っているのだから、簡単な話で解決するはずもない。

政治の力や国際協力などを得て、やっと回収がついた政策には愚にも付かぬ意見も多かったが、なにより日本自体の政治が酷い時期が長かった。

国際社会にある国家を、会社または企業という形で現すのならばわかりやすいと思うのだが、民主党の政策は常に自社の利益を損なう方針を貫いているという事に気がつかなかったのか？と問いただしなくなる。

会社というものは利益を上げなければ成り立たない。当たり前的事だ。

普通の会社ならば役員の汚職は簡単に許されるものではない、他社からみても信頼をそこなうからだ。

言えば当然なのだが、国家に利潤をもたらすための裏工作は、戦略の上にある作戦であり大切な事であるが。個人利益のための裏金作りまたは流通は企業間の信頼を徹底的に落とす。

そういう事が何故か政治の世界に入ると追求できないというのが日本だ。

ブランドとして名だたる牛肉をもっていた宮崎は2010年口蹄疫

の流行拡大により大ダメージを被る。

この問題にしてもおかしなもので、当時の農林大臣は感染症発覚当時情報を得ていたのにも関わらず外遊を楽しみ、政策は後手どころか最終審判の段階になって実施された。

これを会社に置き換えるのならば、自社ブランドに致命的な欠陥があったとする、初期段階で発覚しその場で修復すれば流通にのる前に製品の管理を行えたという事、製品管理に対して責任ある行動を起こせたという事になるが、これを見逃したのが大臣だ。

会社でいうのなら取締役が自分の旅行が大事で、製品の微々たる欠損など知らぬふりをしたという事だ。

結果何千万という損害を会社に被らせた。なのにこの大臣は事後ものんびりと役職に就いていた。

普通の企業ならあり得ない事だ。会社に損害を与える人間はすぐにも査問委員会にかけられ、厳重な処罰を与えられる。普通の対応だが、事政治家には無い、それだけの損害を日本国という会社に与えておきながらも未だ高給を頂く身だ。それを日本国民が許していた。

みんな自分に直接当たらない熱湯の熱さなど知りもせぬという顔を晒した時代となっていた。

「日本は……あの戦争で大切なものから全部手を離しちまった。それが正しいと教え込まされてこのざまだ」

石川はいつも言い続けている言葉と共に酒を煽ると、思い返していた。

日本人は不思議な人種であり、忘却を得意とする奇人であるという事を。

大戦から向こう、無防備国家となった国を護るのはアメリカの勤めと闇雲に信じていた。

仕方のない事だが、大戦に勝った当時のGHQ司令は無能だった。押し寄せる中共の波を前に本気で日本にスイスランドを建国できると信じていた。

もちろん鼠が国王になるドリームランドを世界展開する事を実施したアメリカだ、本気でそう考えていたのかもしれないが、世界はそんなに甘くなかった。

中国、ソビエトによる南進。第一弾として朝鮮戦争が起こる。虎視眈々と日本を我が物にしようとする共産勢力の前に無能な司令は、核攻撃をと声高くさげび解任される。

そんなものを抑止力につかえば世界が破滅する事を、最初につかつたアメリカは理解していた。

アメリカは大軍を要して半島戦争の挽回を図り38度戦にて停戦にこぎ着ける。この時日本は潤った、戦争特需で焼け野原だった国を立て直す足場を作る事ができたが、それが本当の意味での不幸の始まりだったのかもしれない。

「本当の不幸は足下のなくなったこの国に、潤いだけを起こし軌跡の復活などと思いつまませた事だ」

沢登老人の待つテーブルに戻った石川は手酌でウイスキーを注ぎ足すと目をつぶった。

日本の転落してきた道を思い出して。

軍需のおかげで、焼け野原だった町に工場は建ち並び人々のくらしが潤い始めた頃。それでも隣の国の争乱はうずたかい炎を巻き上げていた。なのに日本は再軍備をしない、吉田茂の無能さ加減はここに開花する。彼はマツカーサーにまったく頭の上からない男だったが内政にはそれなりの手腕を働かせ経済には良き規範を見せたが国を護る事には熱心さがなかった。

それもまたさらなる不幸に拍車を掛けていただけだと今なら言える。

国内は穏便に国外で行われている蛮行や、日本国に下される評価を正しく告げなかった。

曰く恐ろしかったのだろう、せつかく戦争を破棄する平和憲法を頂いたのだから、あの暗黒の時代だった太平洋戦争の時代に戻りたくない、兵役を再編成されたくないという国民感情を理解したつもりでいた。

自分の国を自分達で護る必要はない、マッカーサーに従う事でアメリカが日本を守るべきと。

そんな身も蓋もない言いわけの中、起こった朝鮮戦争。

まったく国際社会で通用しない理屈を日本政府は軍備の再生を懇談にきたダレスに通達するというあきれかえる事態がおこる。

日本を占領したアメリカの7年は、1つの国家を骨抜きにするのに十分な期間だった。

親愛に満ちた占領、後年日本のある政治家はそう言った。馬鹿げた話した、自分の国を侵され教育の制度や歴史までねじ曲げられたというのに、どこに親愛がある事か？

「アメリカは極めて紳士的な統治をした」

ぬるま湯につかった脳みそは恥も外聞もなく語った。

「まとも政治家なんて大戦後にいたためしがない」

「だから我々がやるのか」

沢登は髭を整えながら、無くなったグラスに自らも酒を注いだ。

「そうだ、政治がダメなら経済が主導をとって国を動かす。そのぐらゐの覚悟が必要という事だ」

鼻息もあらく噴いた彼は、また議事堂の側に目を向けると

「商売も政治も戦争だ。立ち止まったら負けちまう」

これから集まるであろう財界のメンツを前に大きな一息を着いて見せた。

5・危険水域

大理石も安くなったものだ。

工期短縮と安全性の確保、どこか矛盾のある指標を掲げながらも世界に誇る建築技術を手に入れた今を思つて指をならす。

「お集まりです」

空調の効いた部屋、偽の大理石表面を撫でるようにさわっていた手が止まると、磨りガラスのように鈍く光る石に写った自分の輪郭をなぞる背中に声がかかる。

後ろに立っている黒いスーツの男は、地味な紺のネクタイで自分の首を締め上げるように選りを正した顔で振り向かない石川の背にお辞儀をした。

「政務官は？」

黒の石、中身はセメントにテラゾーの張りばての前に疲れた男の顔は写っている。

つまらなそうに額を搔くと、鼻から一息を落として聞く。

「今日は一人だけ、代理で」

「代理：財界もずいぶん舐められたものだ」

大きな手、節くれの目立つ指が大理石の壁に平手を付くと

「見立てばかりが良くなっても、中身がな…いつまで経っても整わぬか」

あの一大事件から政治が飛躍的に良くなる。改善されるという方向性はどこにも示されなかった日本。

ただ、中国との距離を明確にし外交のカードとして使われる物を減らしたただだった。

それだけでも乳離れが出来た。そして技術力の大切さを再び習得した。そう言いたげな政府の出方は石川にとって子供のお遊びにすぎず、相変わらず愚鈍な者達に過ぎなかった。

なのにやつらは「政治主導」が国の根本であるという御旗を理解も

なく振りかざし、国家の財産を作る者達との大切な絆はただ一つ金であるという態度を崩さなかった。

甘やかされた政治家二世などに芯の通った理論が生まれるのは難しい、まるで中国の小皇帝（幹部の一人つ子は裕福すぎてわがままである）達とかわからない、というよりも父親の作った稼ぎを食いつぶすように居座る代議士であれば百害しかなかった。

当然悪い手本だけは見習い易々と金を得る事には熱心な者達に石川は気概無き議員が増えたことと、自分達との懇談をないがしろにする者達を実に苦く思っていた。

「腐った温床を絶つのは時間がかかるというものだ」

苛立ちで背を向けたまま、壁をかち割りそうな石川の背に向けて沢登が代弁をした

「だが、勉強熱心な者達は今日も来ている」

細くなつた眼を皺の中で尖らせて。

「勉強熱心、右よりの国防族がか？また夢みたいな戦争を書き綴つた仮想戦記のお話を聞かされるだけじゃないのか？」

姿勢を直し肩のこりをほぐすように腕を振る石川に沢登は耳打ちした

「だが備えは必要だし、我らが把握しておくこと、コントロール出来るかをさし計る為にも懇談は大切だ」

老人が頭に浮かぶ不安をかき消そうとする仕草を見せる

この何年か、緊迫した海と隠された資源の利権を巡って政府財界と防衛族は何度も懇談会を持っていた。

財産を守るといふのは聞こえはいいが、結局のところ金儲けができやっとその台詞が出るのが商売人というもの、飯のネタが埋まっているであろう海を好き勝手にされては困るという自分達の言い分を振り回すには色々な理由が必要になる。

「日本国民の宝である海洋資源を守りたい、有効に使いたい」

この台詞なかなか功を奏していた。だが間違つた認識もたくさん育てていた。

ネットの発達した日本では国家の弱腰を非難する言動は電波によつ

てあちらこちらに飛ばされ、非難の矢は所狭しと飛ばされたが実際に政府に向かって働きかけた学生など米粒ほどにもいかなかった。いたくもかゆくもないネットスラングで自分達が精一杯活動した気分浸る勝利者が増えただけで、日本国の根つこの病みを止める事など誰にも出来ていなかった。

間近に埋まった資源を掘り当てて、一気に超大国に名乗りを上げよう。

間違った認識の最たるものがそれだった。産油を持たない無資源国家が手に入るエネルギーで一躍世界に名を馳せる国家となる夢。

政府指標に夢見た夢想な戦争論がタケノコのように乱立したのも、尖閣の事件以降の一つの特徴だった。

今まで平和にあぐらをかき続けた国家は備え大事と早急な動きを見せ始め今に至っているが…

「言うだけなら安い、行うのに金がかかり、それを国民が知り国家が支える準備がなくて何が戦争だ。夢を見るにしてもたちが悪すぎる」

「そんなくだらない結末を見ぬために、金を撒いているのだろう。何度もネクタイの根を揺する太い指は、自分の首を絞める役目の重さを振り切りたいと考えていた。

「そつだ」

沢登と石川、本来なら親子ほどの差があるタッグはいつもこの話で揉める。揉めながらも前に進む道を模索していた。

「それで中国が動き出したからと…何が聞きたいのか？」

「演習に向かった先は「危険水域」だ。あちら（アメリカ）の出兵も実に気になる所だ」

「よせよ、アメリカにご機嫌伺いをしてから警戒しようなんて。そんな子供みたいな話をここに持ってきたんじゃないだろうな？」

一昨日入った情報。

中国浙江省寧波に詰めていた航空母艦鄭和が東シナ海域に向け演習のために出航。

アメリカから政府に連絡の入る2時間も前に情報を受け取った石川。「寧波の、あの赤い海に浮いていた鯨が動いて…でなんだ」

「それが心配だ。何年も遠洋に出る事のなかった船が急に動いたんだ」

石川には今更何故にという話しだった。中国海軍が自国の威信を賭けて作り上げた空母鄭和は、建艦落成当初は世界中に名を知らしめた船だったが、その後は鳴かず飛ばずの状態が続いていた。

威圧外交の一環として一時は東京湾に姿を現すのでは？という憶測さえ飛んだ巨大空母は沈黙を守るかのように、ただひたすら中国沿岸部で戦闘機やヘリの訓練を続けるに過ぎなかった。

初の空母が何処に出しても恥ずかしくないように徹底したテストが行われているのか？

それとももう一隻の中山が出来るまではどこにも出ないとしているのか？

憶測の中にあつた白い壁の空母は、理解の及ばぬ領域からやっと重い腰を上げという事態。

「外に出てみたくなつたのだろうよ」

「それですめば良いが」

たかがそんな事にも、本来誰よりも目を輝かせている石川だが、沢登がどんな事も次の世代との懇談をと頼む言葉には従っていた。

だからこんな堅苦しい姿で会議の場に向かつていた。

「ガキの世話がそんなに大切ならば、引退しろよ」

沢登の、次の世代に引き継がれる思慮というものには賛同しつつも、疲れる事だと首をならす石川。

「よせ、相手がガキであるのなら引退しても心配は尽きない。これはな、自分の為にな、呆け防止のために働いているとも言える。そんなに私をバカにするな」

記譜を読むような足取り、ホテルの廊下に張られたモノクロームのモザイクを踏み先を見る。

二人の前にはお堅く制服を纏った中年の男が二人立っている。挨拶

は無言の敬礼と言わんばかりの顎が鋭く目を合わせる。

胸元に輝く高位階級の将校達の前を、彼らより体格の良い大男石川が通る。

「ご苦労だな、何度来ても同じだが。戦争など誰も得をしない事について熱心に語るヤツなど、頭のどこかがいかれてるんだ。いや、亡霊の恩讐に自分を乗っ取られてる浅ましい者にすぎない」

事が起これば戦わなければならないという使命を持つ者達の目線に石川は悪態をついたが

「戦争を望んで話しているわけではありません」

野太く安定した音感の声が返る。小脇に制帽を抱えている彼ら防衛関係の者はいつもと変わらぬ砕けぬ口調で続ける。

「その当たりをいつまでも誤認したままでいられては困ります」

開かれた扉の中、ホテルのラウンジを貸し切った会議室はまるで会食の場のようにも見えるが、中には白髪交じりのスーツ立ちが多く席に着いている。コンパニオンなど一人もいない色気のない空間だ。「やあ、ごころうさんだ。今日も騒ぎの予感がするというだけのことに良く集まってくれた」

大きな手が両方に開き、面倒ごとかも？という予測程度に集まってくれた企業、財界のメンツに挨拶をすると座長の椅子に腰掛けた。

「聞いていると思うが、またもこりずに問題を持って行くつもりらしい、東シナだ」

「中国国内の政情不安を息抜きするためかな？おきまりのコースで石川の声に最初の返事を返したのは太陽電池などを一手に取り仕切り、中国での工場を構える大手電機メーカーの重職古賀だった。

白髪というよりは半分以上失った髪を未練がましく耳周りと襟足に残した分厚い眼鏡は続けた。

「どの企業体もご存じのように、あの事件から我が国の企業は中国に大きな工場を置くことを控えてきた。どちらかと言えば本拠地として置かず距離をとり外交の邪魔にならないよう多くの防止線を引いた」

「結果、現地法人との信頼関係は悪化し、より中国から距離をとる方法がすすめられたな」

現地との信頼が悪化したのは中国共産党の指示でもあった。あらゆる方面からの圧力を慢性的にかけることで、尖閣の事件を手中にあるうちに収束させたかった中国上層部だったが、最初から良い方向を見失っていた。

そもそも尖閣の事件は中国政府が望んだ事件ではなく、明らかに事故だった。

だが改革開放で進んできた経済に深く刻まれた格差の断崖による不満のはけ口が必要となっていた。

「うまく使えるかもしれない…」中国は当初それを実行した。

最初は官製デモというおきまりのパターンで、人民を煽り日本打つべし恫喝を発し不満の出口をうまくコントロールしようとしたのだが…これが思わぬ事を引き起こしてしまった。

内陸部に燻っていた不満に。中産階級の党員、それらの持つ子供達の格差に対する怒りを誘発してしまう。

「日本憎し」から始まったデモはあらゆる国のメディアを通じ中国の立場を悪くしていった。

完全に右手と左手の使い方を見誤ったのだ。

止まらなくなったデモは表向き反日の旗を掲げ続けたが、中身は複雑だった。

沿岸部に住む富裕層との格差、大学を出ても幹部職に就くことのできない内陸部の学生は農村部の不満を上乗せした形であちらこちらに爆弾を仕掛けていった。

いままでどおり「日本憎し」の旗を掲げながら、自分達を区別する者達に対して戦い始めたのだ。

これらは表に出ることのない情報だったが、石川達はそれをこれは良しと利用した。

それまで政府の後手で被害をいつもかぶりつつつけていた企業体は、自分達の手で微弱を決める綱引きと駆け引きを開始したのだ。

貧しい学生達に略奪される店に置かれる雑誌、情報源を色々と与えた。自分達が中国の中でも差別をされている事をやっとなんと解らせるという混乱を作った。

「今回も学生運動や、地方部の反乱を抑えるための示威行動を取るのではという「最悪のパターン」は考えられています」

「そうだろうな、それが手一杯のハズだ」
手元の水を煽る石川。

あれ以来幾重もの線を張った。警戒すべき国に工業力を求めてしまった日本との綱引きは常に必要になっていた。

「ですが、今回はあの空母が出ています」

財界、企業体がいづもの手でくるかと声をそろえた時にその横槍は入った。濁りのない若い声で。

中年の防衛省幹部の後ろに着いたスーツ、ひよろりとツクシのような体を真つ直ぐに立て、軽い一礼をすると尖った目元を隠す眼鏡を指で押して。

「何かを狙っていると考えるべきです。故に台湾、中国の動きを無視する事はできません」

「無視はしない、いつだつて見張っている」

半紙に書かれた情報の取り纏め書を飛ばし顔を上げた石川の前、一番末席に立つ彼は歩を前に出ると

「ご挨拶が遅れました。防衛政務官東雲誠あかしげみつるの代理、赤重充あかしげみつるです。よろしく願います」

何を頼むか？石川達が訝しく目を細める中に彼は真つ直ぐに歩くと、若者特有のゼスチャーを交えて話しを始めた。

「備えが必要では？彼らは空母を持って尖閣諸島の実効支配を行う、または上陸を開始するのではと考えられませんか？」

「ありえん事だ」

即答の乾いた返事をしたのは沢登老人だった。片目はすでに閉じたままの顔に瘦せた体は甲高い声を続けさせる

「それは中国にとってなんの得にもならない、目の前の資源が欲し

いのはどの国も一緒だが、いくら内陸部の不満をそらすための宣伝とはいえ、そこに足を踏み入れたら後戻りが出来ない事ぐらいは知っている」

「一度失敗しているしな」

「追隨するように古賀も言う」。

「だからこそ、次は本気でくるのではという予測を我々は立てております」

「政府はそんなくだらない妄想をしているのか、それとも君の意見か？赤重くん」

周辺危機の情報イコール戦争に発展という単純すぎる図式、もちろん石川達の中にもあるが順番をすつとばしいきなり戦争を語るのには頂けない話で集まった老獪達には馬鹿げた戯言に過ぎず会場は沈黙を守った。

見るからに若く、まだ40歳に手が届く程度の彼は、自分を煙たそうに見る老人達に尖った口をまくし立てると

「政府は常にききに備え最悪の状態も予測しておく必要があるという見地からの話しです」

「最悪が先に出てくるような話は必要ない、そこに行くまでの過程をまず考える」

石川の太い指が赤重の眉間を狙い撃つように指す。

「そこに触れ、上陸などという事になればアメリカも黙ってはいない」

沢登も薄いながらも調べられた調書を横目に言い返した。

なだめられるような会場の視線の中、肩をすばめる姿を見せつつも赤重も黙ってはいなかった。

内心にある老人達の杞憂に付き合わされていると鼻柱に棘を見せると、軽めのため息を絡ませて

「やれやれ、どうしてそう言いきれますか？アメリカが必ず日本を護ると、本気で信じてるんですか？貴方達は？」

「そんな口約束を鵜呑みにもしていないが、単純な考え過ぎるんだ

よ、君が」

久しぶりの懇談に顔をだし、新手の国防族以外の者が勉強に来たのかと、少しは考えを改めていた石川はうんざりと煙草をくわえた。結局今時の若造、言うに事欠いて単純な戦争論にを斑泣ける姿に苦々しく感じるばかりで深く煙りを食らうと

「前の時もな、あれほど日本を恫喝し圧力をかけてきたが実際はそんなところじゃなかったよな。今もそれは代わらない、お互いに経済という血脈を分けた国同士がそんな簡単に戦争ができるか？それとも君らが戦争したいのか？」

長く説明するのは嫌いと言煙をはいた石川に、赤重は義を吠えた。

「向こうが望むなら、護るためにするしかありません。その覚悟は出来ておりますよ」

若造と見くびられた、赤重の気持ちはそこに火をつけ吐きだしていたが相手が悪かった。石川の目は一瞬にして怒りにそまり、沢登の額にも亀裂が走っていた。

「夢想家が、夢で戦争を語るなや！！」

テーブルの上の水がグラスごと落ちる地響き、石川はゆっくりと立ち上がると赤重を睨め付けて怒鳴った。

「良く聞いとけよ、世の中がそんなに甘くないって事を教えておいてやるcollegeboyが」

5・危険水域（後書き）

静かの海が月にあるという事を感慨深く思う今日この頃です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2505/>

日本黒示録

2010年10月26日17時14分発行